

庭にて

エミリオ：君、知っていたのか？

ミゲル：ここへ来て2年だ、ロッケフェレ、色々学んだからね。君の前はパコと同室だった。彼もアルツハイマーでね。いい友達だった。

エミリオ：死んだのか。

ミゲル：いいや良く分からないが、生きているはずだ、2階に連れていかれた。まだ上に居るのだろう。

エミリオ：私は、あそこに行くのはいやだ。

ミゲル：ねえ、エミリオ、そんなに心配することはない。アルツハイマーは真実、早く悪くなる病気ではない。しかし病状は悪くなってきたと分かったら、君は知っているだろう、君が見つけたあの薬、私は自分のために病状が悪化した時に備えて溜めてあるのだ。その時に使うのだ。君のためにも手に入れようか。

エミリオ：いいや、そんなのは良くない。

ミゲル：ああ、君の考えは良くない、ロッケフェレ、ここではモラルなんて何の役にも立たない。選択肢は二つしか無い。一つは自分を騙し続けることだ。オリエント急行に乗っていると思いつべてを楽しく、春にはプールで泳ぐつもり、最後には皆と2階にあがる。もう一つは現実と向かい合うことだ。

プールにて

ミゲル：何てこった、ひどい！ロッケフェレ、すぐ出ろ、狂気じみたことはすぐやめろ、ロッケフェレ、聞こえるか？すぐ出てこい、馬鹿はやめろ、何をする気か？ロッケフェレ、ロッケフェレ、くそっ！ロッケフェレ、何をしているのだ、こっちへ来い、ここから一緒に出るんだ！

エミリオ：触れないで、ほっといてくれ、愚かなことには、もう、うんざりだ！私はまだ死んでいない、分かるだろう、まだ、私は死んでいない。1年後のことは私には分からないが、今、私は生きています。そしてプールで泳ぎたいのだ。そして今プールにいる。君が望まなくても、議論はそこまでだ。君は不愉快だ。

ミゲル：それだけか？ただ泳いでいるだけ！

エミリオ：そう、それだけ、他にすることがあるか？

ミゲル：しかし、ロッケフェレ、君は泳ぐ格好ではないよ。泳ぐ前に服を脱がなくては。

エミリオ：君は人のことを批判できるか、君もコートのままだ。

ミゲル：ロッケフェレ、ねえ、君と私は何とかうまくやれるよ。2階には上がるつもりはないね。

部屋にて

ミゲル：私にまかせて、大切なのは服装がしっかりしていることだ、ロッケフェレ。今日は特別の日だ。医者や看護婦たちは身だしなみで、私達の頭の様子はどうなのかを判断する。分かっているね。

エミリオ：そうだね、あのご婦人、厚化粧のご婦人と同じだね。

ミゲル：その通り！フォセファと同じ...朝の様子を見れば彼女の精神の具合が良いか悪いか分かるだろう、これで良い、シャツを中に入れて、ネクタイはどちらにする？いつものか、赤か。

エミリオ：いつものでいい。

ミゲル：本当に？赤いほうが上品と思うが。

エミリオ：いやいや、いつものでいい。本当のところ赤いのは好まない。使ったことがない、何故ここに持ってきたか分からない。感傷的な価値基準で持ってきたのかもしれない。

ミゲル：馬鹿な、うまく結べない、うまくいったことがない。完璧ではないが、まあ良いだろう

エミリオ：有難う、ミゲル。

ミゲル：いいよ、袖口のボタンだ。左ははずしておくよ、答えを読むのに障害にならないように。ここに書いたのを忘れるな、え？

エミリオ：分かった、分かった。

ミゲル：質問はいつも同じだ、だから何も問題は無い、体に対して手の平の維持に気をくばって。見られないようにね。緊張しているか？

エミリオ：私が？いいや、真実、人生初めてのカンニングだ。

ミゲル：ねえ、心配しないで、ロッケフェレ、エキスパートの私が付いている。さあ、腕を通しなさい。私がそばにいて、すべて上手くするから、心配は要らない。

エミリオ：君と一緒に診察室に入るとは、私に言っていないね。

ミゲル：診察室に入る？診察室を今日は使うことが出来ないよ、ちょっとした問題が起きてね。